

日本公衆衛生雑誌編集委員長退任にあたって

東京大学大学院医学系研究科前教授

甲斐一郎

2006年1月に前任の岡崎勲先生から本誌の編集委員長を引き継ぎ、6年間にわたって編集委員長を務めてまいりました。御支援いただいた編集委員・編集担当理事や査読委員の先生方、会員の皆さまには心から感謝いたします。退任に際し、一言御挨拶を申し上げたいと思います。

本誌は学会誌として、(1)投稿する価値の高い権威ある学術雑誌、(2)多様な会員に親しまれる雑誌、という、なかなか両立の難しい二つの目標を持っております。6年間でおこなってきたことについて列挙します。

前者については以下をおこないました。

- ① 掲載論文について、理事会の御理解を得て、学会ホームページで全文をPDFで公開することにしました。著作権の関係で1995年(第42巻)以降、最新号までですが、これにより被引用回数が増加することが期待されます。今後、各種の論文検索サイト(J-STAGE、メディカルオンラインなど)への取載をめざしております。
- ② 初回投稿から初回お返事までの期間の短縮に努めました。従来は3.5ヶ月程度であったのが、メール審議を多用したことによって2.5ヶ月程度に短縮できました。今後、さらに短縮が望まれますが、現行のやり方ではこれが限界で、ネット上投稿・査読システムを導入するなど根本的な対策が必要かもしれません。
- ③ 文献リストの記載のチェックを強化しました。これにより掲載論文の資料価値が高くなり、著者に感謝されております。
- ④ 疫学研究倫理指針の原則遵守を投稿規定に明記し、この面での編集委員会のチェックを厳格化しました。学術雑誌としては不可避の措置だったと思いますが、倫理審査を受けにくい現場の投稿者にはしきいを高く感じさせることになったことは否めません。理事会に御検討いただき、学会の倫理委員会が立ち上り、倫理審査を受けにくい投稿者に対して対応することになりました。
- ⑤ 投稿規定を改正し、「研究ノート」を新設しました。従来、原著性の高くない実証論文に対しては「資料」という分類とすることが多かったのですが、よりの確に実体を表す分類になったと思われまます。

後者については以下をおこないました。

- ① 2008年(第55巻)から、念願のA4版化が実現しました。読みやすさが格段に向上したと考えております。
- ② 「連載」、「情報ボックス」の欄を新設しました。特に、「連載」は多くの執筆者の御協力により、多彩なテーマについて興味ある記事が掲載され、会員に親しみやすい雑誌になるのに貢献したと思います。

しかし、二つの目標に対してはまだ不十分な点が多いように思われまます。最も大きな問題は投稿数の伸び悩みです。試みに、岡崎先生の二期目(2003年～2005年)と私の一期目(2006年～2008年)とを比較すると、新規投稿数はそれぞれ417編と373編であり、一割ほど減少しております。この理由はよくわかりませんが、特に現場の投稿者の方々にしきいが高い雑誌と感じ

られることや、研究者の世界の国際化にともなって大学・研究機関からの投稿がもっぱら英文の他誌へシフトしたことが考えられます。なお、採択率（新規投稿後2年間までの採択割合）はそれぞれ49%と46%とそれほど変わらないので、以前と比べて査読が厳格になっているわけではないと思われます。

2007年と2008年に本誌に投稿され、不採用になった50編ほどの論文について、筆頭著者と論文タイトルを元にして、その後どうなったのか調べてみたところ、半数以上が1年以内に他の雑誌に掲載されておりました。したがって、投稿者の方には、本誌で不採用になることをむやみに心配せずに、どんどん投稿していただきたいと思います。本誌の査読は丁寧なコメントに定評があり、仮に不採用になったとしても、その後により論文に修正するのに大いに有益と思います。

長い間、いろいろな皆さんに支えていただいたことに、あらためて感謝いたします。今後、新編集委員長の田宮菜奈子先生のもと、本誌がますます権威ある、親しみやすい雑誌になることを祈っております。